

小笠原諸島世界自然遺産地域の現状及び当面の課題

1．小笠原諸島の自然遺産地域における近況（トピックス）

小笠原諸島における自然再生に関しては、関係機関による取組の結果、小笠原諸島全体でのアカガシラカラスバトの増加傾向、聳島列島でのクロアシアホウドリの繁殖数の増加傾向等、保全対象となる種に回復傾向の見られるものもあります。

一方、外来生物の問題については、新たに 2 つの大きな危機的状況が見られました。兄島におけるグリーンアノールの侵入によって、兄島の固有昆虫相の健全性が脅かされています。また、父島鳥山地域におけるニューギニアヤリガタリクウズムシの侵入・拡散によって、父島島内に残された、陸産貝類のわずかな生息地が壊滅の危機に瀕しています。

関係機関においては、これまでの取組に加え、これらの新たな外来生物の脅威への緊急的な対策を進めています。

2．小笠原諸島の世界自然遺産の管理上の課題

（1）世界遺産登録後の村民生活・産業

平成 24 年度から始められた村民意見交換会等の場を通じて、新たな外来生物拡散、ペット等の動物の適正飼養、環境教育等、自然再生事業の取組と村民生活との接点に関するテーマについての議論が進められました。また、地域連絡会議においては、オガサワラオオコウモリによる農業・園芸作物への被害、ネズミによる畑地や集落での被害等の課題も指摘されています。これらの地域的な課題を、関係機関や科学委員会等の専門家を交えて議論するために、地域連絡会議の果たす役割は重要です。

（2）小笠原諸島の自然資源の持続可能な利用について

世界自然遺産への登録後、増加傾向にあった来島者数（観光客、事業者、研究者等含む）は、落ち着いてきました。現在、観光に伴う自然環境への大きな影響は見られません。引き続き、エコツーリズム等を通じ、島の自然文化への理解の促進、利用上の安全管理、小笠原固有の生物多様性という自然資源の持続的な利用の方策を模索する必要があります。

（3）世界自然遺産の価値の保全

兄島へのグリーンアノールの侵入をはじめ、自然保全上の重要地域に、新たな外来生物が侵入・拡散するリスクは依然として高く、また、父島の陸産貝類等、絶滅の恐れの高め高い種の域外保全が喫緊となっています。関係機関では、これらに対処するための施設の検討を進めました。

外来生物対策による自然生態系の変化が大きいことから、これまでの外来生物対策の進捗状況の評価や、順応的な対応が必要です。これに関して、生態系保全アクションプラン改定ワーキンググループ等で議論が進められ、第 2 期生態系保全アクションプランでは順応的管理の仕組みが改善されました。

3．小笠原諸島世界自然遺産地域における課題の共有及び対応

上記のような小笠原諸島世界自然遺産を取り巻く状況の変化によって、島内の環境・社会・経済に対し、様々な課題が生じることが想定されます。これらの変化を的確に把握し、柔軟な対応を検討する体制整備が必要です。

(1) 島内関係機関・団体における課題の共有及び対応

島内の課題を地域内で共有するため、現地事務局会議及び地域連絡会議等を通じて、関係機関・団体が連携して課題に取り組む体制作りを努めます。

(2) 村民との課題の共有及び対応

平成 24 年度より、小笠原村において、世界自然遺産に関する村民意見交換会を毎年実施することとしており、平成 25 年度も父島、母島併せて 2 回開催されました。今年度は、兄島でのグリーンアノールの侵入を受けて、兄島の視察会やボランティア活動等の取組も併せて行われました。

4．今後の科学委員会等の予定

島内で議論された地域の課題や対応の考え方については、科学委員会等の場で共有し、島内外の関係機関、専門家と積極的な議論を行います。これらの島内の自然遺産に関する現状や課題（環境教育、愛玩動物、外来種の拡散、オガサワラオオコウモリ等）については、地域の課題に関するワーキンググループ等を立ち上げ、地域の関係者が集まって議論を行い、地域連絡会議や科学委員会に報告する予定です。